



# 対話と融和でちがいを乗り超え、心を一つにシン・セカイを拓こう。

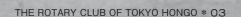
東京本郷ロータリークラブに刻まれた30年の歳月。 それは白熱の議論の歴史とも言えるだろう。

皆が一生懸命だった。 時には熱が入り過ぎる場面もあった。 激論の末、席を蹴って去ろうとするメンバーもいた。 それでも次の例会では何事もなかったように笑顔で集った。 その繰り返しの中で皆が少しずつ大切なことに気づき始めた。

それは個性や職業、立場や信条すらも異なっていても同じ思いを持っているということ。 一人ひとりが東京本郷ロータリークラブの「新しい世界を創る」情熱を共にしていた。 その熱は、我を超える I serve の奉仕の精神で結ばれていた。

だから、本音の対話は本物の融和へと結実し、 様々な局面に立ち向かうことができた。

この記念誌に登場する様々な活動やプロジェクトのすべては 心を一つにして、新しい世界を目指した結晶と言える。 そして人類が未曾有の試練に直面する今、 同じ思いで、再びシン・セカイに挑もうとしている。



#### 最初の10年

## 進·世界

### 創立の息吹で前進を止めなかった10年

新しい地域へ。新しい世代へ。 ロータリークラブの親睦と友愛、 そして奉仕の理想を追求していくために 新しいロータリークラブを創る。 その熱い胎動から東京本郷ロータリークラブは始まった。

創立時のメンバーのほとんどがロータリークラブの未経験者だった。 だからこそ、何も恐れずに前へ、前へと進めた。

「無我夢中」という言葉がある。 1991年から2001年に最初の10年は、 まさに我を忘れて、進み続けた夢のような時代だった。



#### 誕生前夜。

1990年11月、北ロータリークラブの40周年記念事業の一環として新クラブの拡大運動を始動する。後に東京本郷ロータリークラブの初代会長に就任する大森暢久拡大委員長と、及川質四副委員長、そして初代幹事となる春日幸八氏の3人は会員候補者を地区内在住者に絞り、その会員増強に奔走した。

新しいロータリークラブの結成は容易ではない。新クラブの創立には25名という「最低人数 | が定められている。

また創立会員の50%以上は地元地域社会の居住者でなければならなかった。

しかし文教の府である本郷地域には、地域や社会に対して高い志を持つ人物が多くいた。ダイヤモンドを掘り当てるような人材発掘への取り組みが続いた。

そしてついに東京本郷ロータリークラブは誕生した。 1991年3月13日、陣容は最低人数を大きく超える88名。 その創立総会が東京ガーデンパレスにて開催された。今 や会員にとって馴染み深い点鐘やロータリーソングも多く の会員が初めて耳にするものだった。

創立総会では特別代表に就任した都築俊三郎氏より 結成経過報告の他、定款や理事、役員が、そして初代会 長に就任した大森暢久氏より全会員が紹介された。

初の東京本郷ロータリークラブの集い。その中で新入会員たちは、ロータリーの奉仕哲学や奉仕理念を知っていく。 感動と決意が会員の胸から湧き上がってくる。それは学校 や職場では経験したことのない新鮮なものだった。

創立されたばかりの東京本郷ロータリークラブが次に目指すのはチャーターナイト(加盟認証状伝達式)。その実行委員会も発足され、会員は準備に取り掛かる。開催日までそれほど日にちはなく、大急ぎで準備を進めなければならなかった。しかしもはや躊躇はなかった。

#### 議論を重ねて大成功させた チャーターナイト。

それぞれの会員が仕事を持っている。しかもそのほとんどが経営の中枢に携わる重責を担っていた。準備は仕事の激務の合間を縫って行われた。時間があるから活動するのではない。職業という社会において重要なところで必要とされる多忙な人こそ、ロータリークラブに関わる意義がある。そのことを準備に携わった会員は体感していった。ロータリー経験者はわずか3名。しかしこれが逆に会員同士の結束を強め、連日、熱い議論を続けながら、準備に取り組んだ。

そして創立総会から約2ヶ月後の5月8日、東京本郷ロータリークラブはチャーターナイトを迎えた。会場は帝









O4 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO \* O5

国ホテル東京富士の間。式典では都築俊三郎特別代表から創立の経過報告が行われた後、258地区(現2580地区)の加美山節ガバナーから認証状が伝達。 場内は大きな拍手が湧いた。

続いてスポンサークラブである東京北ロータリークラブの北本会長、東京本郷ロータリークラブの大森暢久会長の挨拶に続き、当時の鈴木都知事、遠藤文京区長、飯村台東区長らの来賓が挨拶に登壇。ロータリー財団基金贈呈、米山記念奨学金基金贈呈、湾岸難民基金贈呈、青少年育成事業といった記念事業が紹介され林有厚ソングリーダー指揮のもとで「我等の生業」の歌声が会場に広がった。歴史に残るチャーターナイトの記念式典は大成功の中で閉会。記念講演、祝宴へと続いた。

創立時のクラブ標語は Enjoy and Enjoy ROTARY 〜大いに楽しもうロータリー。その言葉の通り、東京本郷 ロータリークラブは和気あいあいと前進を始めたのである。



#### 最初の奉仕は青少年育成から始まった。 湯島小学校図書寄贈。

発足まもない東京本郷ロータリークラブが記念すべき最初の奉仕活動として取り組んだのは、湯島小学校図書贈呈だった。同校は開校120周年と新校舎誕生を祝し、記念式典を催すことになっていた。その実行委員会から当クラブに図書贈呈を要請。希望する図書一覧表が寄せられた。例会では賛成に全会一致。1991年11月30日、児童用図書「スポーツシリーズ」全20巻と全集本6組を寄贈することができた。

文教の府である文京区に根を張り、活動を始めた東京 本郷ロータリークラブが取り組んだ初の奉仕活動が青少 年育成であることは後のクラブアイデンティティーの確立に も大きな影響を与えていく。



#### 暴力追放・交通安全のモニュメント設置。

創立の次の年である1992年にはNHK「シルクロード」 ビデオ全30巻の文京区教育委員会への寄贈、覚醒剤乱 用防止啓発運動など奉仕活動は続いていた。

その前後に本富士警察署から暴力追放塔を作ってほしいとの依頼が東京本郷ロータリークラブに寄せられた。会員の多くは、その理由をすぐに察知できた。およそ一年前に発砲事件が起こっていたことは記憶に新しかったからだ。平和な湯島界隈が忌まわしい暴力によって脅かされ、不安な毎日を送っていた。

事件以来、付近の小学校に通う孫が心配で送り迎えが 日課になっている会員もいた。 「地域で役立つために



今、どんなことができるだろうか。そんな話を何人かの会員としていたときにたまたま本富士警察署の防犯課の方が来られたのです。その方から湯島のマンションで発砲事件が起きた時期でもあったので暴力追放塔のようなものを作ってほしいと言われたのがきっかけでした」と設計を担当した柴山修一会員は当時を振り返る。

本富士警察署から出されたデザイン案は四角錐の形に 文字が入るスタイルだったが、建築設計の企業を営む柴 山修一会員には実際の製作が難しく、精度を出すために は経費がかかることがすぐに直感できた。

そこで柴山修一会員が新たなデザインで図面と模型モデルを製作し、バナーをデザインした服部浩美会員の承認を得て実際のオブジェに形づくっていった。

1991年3月28日に起工式、そして落成式が1992年の10月7日に行われた。式典には当時の遠藤文京区長も出席。暴力という暗雲を振り払い、二度と許さないという固い信念を込めて建造された「暴力追放・交通安全のモニュメント」は、今も湯島の街を見守っている。



1995年は世界に対しても目が向けられた年だった。この年度に会長に就任した小勝善一郎会員はクラブのスローガンにもグローバルな見地から「繁栄と調和」という言葉を掲げている。

スローガンの実践への思いがあふれる中で取り組んだのがタイ国植林プロジェクトへの参加だった。同プロジェクトはタイ北部で焼畑農業によって次々と森林が焼かれていることを第2580地区が危惧し、1993年から地区内各クラブに呼びかけて行ってきた植林活動である。東京本郷ロータリークラブが参加したのは同プロジェクトが第2回目となる1995年からだった。第2580地区が進めたこのプロジェクトでは、2代3代と当クラブで幹事を務めた瀬川昌輝会員も地区の世界社会奉仕委員会委員として活躍。多くのクラブメンバーと共にタイ国バンコックへ飛んだ。バンコックからはタイの国内線にて目的地であるチェンマイ県に向かった。

このタイ国植林プロジェクトへの参加は、翌年も行われた。この年は、16名が参加。メンバーの一人だった山藤均会員は当時をこう振り返る。「現地に行ってみて愕然としました。想像していた以上に森は破壊されていたのです。温暖化や水害を未然に防ぐためにも植林活動が大事であることを現地に行って改めて痛感しました。当時、中学生だった息子に奉仕とは何かを知ってもらいたくて参加したのですが、いい夏休みの思い出になったと思います。現地の高校生とも交流ができ、たまたま誕生日も近かったのでいっ







THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO \* 07

O6 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO

しょに祝ってくれました |。

このときは植林活動だけではなく、東京本郷ロータリークラブらしい取り組みが行われた。それはボールペンを主にしたタイの子どもたちへの文房具のプレゼントだった。

#### 5周年記念事業としてバギオ基金寄付。

タイ国植林プロジェクトに加えて東京本郷ロータリークラブが世界社会奉仕活動として取り組んだのはバギオ基金だった。ここでバギオ基金について解説をしておきたい。1903年に始まったバギオ山頂に続くベンゲット道路の工事には多くの日本人労働者が参加した。そのときに工事に参加した人々の大半は現地に根をおろし、邦人社会を形成。日系フィリピン人として平和に暮らしていたが太平洋戦争時に日本軍に協力したことで迫害を受け、バギオ山中に逃げて生活を送る。

後にバギオに赴任したシスター海野がそのことを知り、救出活動を行っていく。救われたバギオの日系人たちは異口同音に子どもたちの未来を心配していた。長い間、山中に生活していたため、子どもたちを学校に入学させることができなかったからだ。その援助のために開始された育英資金がバギオ基金だった。1996年3月13日、東京本郷ロータリークラブは5周年記念事業としてバギオ基金に寄付を送った。



#### 盲導犬育成支援活動で 一人の"I serve"がクラブ全体へ波動。

1997年当時、視覚障害者1万人に対してその需要を満たせる盲導犬の数は850頭弱という厳しい現状だった。また盲導犬協会の活動資金についてはほとんどが民間のボランティアに頼るしかない状況だった。その中で加茂義男会員は、個人の奉仕活動として盲導犬育成支援を行っていた。

「加茂さんが盲動犬育成の支援活動を行っていることを知り、これはぜひうちのクラブ全体として取り組むべきだと考え、すぐに実行したのです」と語るのは1998年度会長だった松原一雄会員。まず会員に盲導犬の育成現場を知ってもらうために訓練センターの見学会を実施。例会場での募金活動やパンフレット、リーフレット配布等を行い、啓蒙を図っていく。財団法人日本盲導犬協会賛助会員としての入会も呼びかけた。と同時に会員の事業所等に盲導犬協会指定の募金箱の設置を依頼。

さらに1997年11月には訓練センターへの大型犬用バスタブの寄贈を実施した。盲導犬ユーザーによる卓話も開催。その輪はクラブ全体に広がっていく。地区内のクラブで盲導犬育成支援を社会奉仕委員会の活動の一つとして取り上げたクラブは5つにもなった。

また盲導犬育成支援、財団法人日本盲導犬協会主催の





第6回盲人チャリティゴルフ大会に当クラブ会員の積極的な参加が得られ、会員の主催するフリーマーケットにおいても売上金の一部を日本盲導犬協会に寄付する活動が行われた。この盲導犬育成支援活動は1999年に「意義ある業績賞」、「ガバナー特別賞」を受ける。一人のI serveがクラブ全体へと波及した事例の一つである。

#### 職業倫理を高めていく「私の職業」刊行。

職業奉仕は「ロータリークラブとクラブ会員両方の責務である」と述べられている。当クラブにおいても職業の意義をもう1度、確認し合い、さらに高めていく取り組みが行われた。「私の職業」の小冊子の刊行がそうである。

この刊行に当時職業奉仕委員長として携わった大住省 一会員はそのときの様子をこう語る。「新入会員が多く、お 互いがどんな職業であり、どのような理念を持っているかわ からない状態でした。新入会員は自己紹介をする機会はイ ニシエーションスピーチなどでありますが、先輩会員につい てはそれほどありません。その意味でこの小冊子を通して 親睦を深めることができればと思っていました。作成に関し ては仕事の内容や経営哲学について一言程度のコメント を全会員に書いていただき、それを集めるだけなのですが、 それでも数ヶ月かかりました。。

大住省一会員は、例会などで会員と会うたびにコメントの回収に動く。その甲斐があって小冊子「私の職業」が完成した。この小冊子はバインダーのスタイルが取られ、随時新入会員が増えると加えられる形式になっている。



#### 青少年育成の思いは海を超えた。 学校を救おうプロジェクト。

東京本郷ロータリークラブが行う奉仕活動の節目には常に青少年の育成があった。とくにインドネシア国スラバヤ地区の子どもたちに教科書や文房具の提供を行った図書普及プロジェクトでは本クラブが事務局となり、第2580地区の38クラブから協力支援を受けた。この活動は1998年度RI会長賞「ロータリーの夢を追い続けよう賞」に輝く。さらに本クラブの海を超えた青少年育成活動は、多彩さを増していった。

インドネシア第3400地区スラバヤ地域の3ロータリーは「学校を救おうプロジェクト」と銘打ち、スラバヤ市の北に位置するマドゥラ島バンカラン市のカマル小学校の校舎修復事業を行っていた。これに対し1999年8月の理事会で東京本郷ロータリークラブも支援を決定。支援対象のカマル小学校は台風によって校舎が破壊され、1日でも早い修復が必要な状況だった。まだ会ってはいなかったが会員





08 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO

たちには現地の子どもたちの顔が浮かぶような気がした。 前年度に実施したスラバヤへの図書普及プロジェクトのお 礼として寄贈した画用紙に現地の小学生たちが描いた絵 画が贈られていたからだ。子どもたちと会って励ましたい。そ の願いは強まり、2000年2月の引き渡し式で実現する。

## 10周年記念事業「スラバヤ地区 中学校校舎寄贈」。

2000年2月の引き渡し式で現地を訪れた本クラブの会員たちは、スラバヤ・メトロポリタンロータリークラブと交流の機会を持った。その際、崩壊寸前の学校が数多くあることを知り、さらなる協力の必要を依頼された。そして会員たちは帰国後、同クラブからジャワ島のマラン県にあるセント・アントニウス中学校校舎の建て替えと机、椅子等の備品類の整備を実施したい旨の連絡を受け、その支援を2000年7月の理事会で決定。それが10周年記念事業として始動する。当時では珍しいクラブ単独での世界社会奉仕事業(WCS)となった。

工事の進行は早かった。2000年8月には既存校舎の解体作業が開始。2001年1月には新しい校舎と机等の 什器類が整備された。

2月9日、記念式典に参加するため、東京本郷ロータリークラブは代表4名が小嶋ガバナー補佐、アシスタント3名と共に現地へ飛んだ。

「一行が現地の中学校に近づくと周辺から大勢の人が手を振り、歓迎の意を表してくれた。雨でぬかるんだ道の両側には約150名の素朴で柔和な顔の中学生が制服姿で出迎え、私達一行を校庭へ導いてくれた」(10周年記念誌:加藤利雄当時会長)。

完成したばかりの校舎を初めて見ると新校舎には新しい机、椅子、黒板、本棚が整備され、机や黒板の上にはロータリーのマークが取り付けられていた。また本棚には寄贈した700冊の図書が納められていた。

一行は好奇心でキラキラと眼を輝かせて喜ぶ素直な生徒たちの表情に感動を覚える。「私達が退場する時、生徒達は校庭から校門まで2列に並び見送ってくれた。一人一人がほほえみ、控えめに右手を出してテレマカシー(さようなら)と私の眼を見つめてくれ、私はその右手をしっかり感謝を込めて握った。次第に目頭が熱くなり、涙があふれ止まらなくなったが、涙を拭くこともせず、ひたすら感動に浸った」(10周年記念誌)とあり、感極まった様子が文面からも伝わってくる。ちなみにこの事業はガバナーから「意義ある業績賞」を受賞している。







#### 次世代教育を支援する新世代会議 スタート。

「次代を担う青少年に対する教育は、学校だけにまかせておくべきではない。社会も積極的に関わっていくべきであり、我々ロータリークラブもそれを進めていくべきだ」。東京本郷ロータリークラブにはその思いが強まっていた。結果、発足したのが新世代会議だ。

それは他にはないクラブ独自の奉仕活動である。発端は 1999年から2000年の鈴木嘉男会長の年度に行われた 家庭の絆をテーマにした講演会。これを契機に地元を対象 として物品や金銭の支援だけではなく、青少年男女に対し て地域に密着した様々な啓蒙活動を継続的に推進してい くことを決定した。

名称は新世代の健全な心の育成を行うという意味で新世代会議と名付けられた。ではなぜ家庭をテーマにしたのだろうか。鈴木嘉男会員はその理由をこう説明する。

「当時、子どもの命が奪われるという忌まわしい事件が起きたばかりでした。そういった背景もあって教育は、子ども自体の問題であると同時に子どもを育てていく親や家庭を無視するわけにはいかないと考えたわけです。そこでまずは家庭教育をテーマにしていこうと決めたのです」。

第一回新世代会議は、2000年6月1日、文京区民センターで開催。テーマは「家庭教育を見直そう」〜お父さんお母さん子どもの心が見えますか?〜だった。開会の少し前、運営メンバーたちは、場内を見渡し心配になる。会場は20名程度しか来場しておらず、ガラガラ状態だった。ところが開会直前になってどんどん人が増えていった。結果としてほぼ満席状態の160名が集った。

基調講演は「世代をつなぐ心の学び」として元麗澤瑞浪中・高等学校の校長を務め、文部科学省所管の社会教育講師である池田修氏がスピーチを行った。さらにクラブが支援する米山奨学生の曹振権君と元交換留学生の中島由起子さん、そして留学生の受入高校の教師を務める小野寺美枝氏の3人が「家庭の中の私」と題してショートスピーチを行った。この様子は文京区内のケーブルTVでも放映された。

それ以降も新世代会議は「留学」「性教育」「親子の絆」「福祉のこころ」「家庭における親子のコミュニケーション」「大人の品格・子どもの人格」「学校・家庭に到来するIT社会の光と影」「子どもがやる気になる子育て」などを時代を反映した興味深いテーマを検討し、近年まで開催していた。





#### 次の10年

## 伸·世界

### 青少年の未来への芽を伸ばし続けた20年

創立10年を迎えた東京本郷ロータリークラブは、 自分たちの歩みを振り返りながら、 アイデンティティーについて模索を始めた。 その中で見出せたのは、次の時代を担う青少年を育てることだった。 自分たちとは何か。そしてどこに進むべきか。 議論に議論を重ねることで出せた結論だった。

どこまでも東京本郷ロータリークラブらしく、 未来への芽を伸ばし続けることに全力を投じよう。

これほどまでに尊い奉仕はない。これほどまでに心躍る活動もない。誰もが、すっと腑に落ち、それはすぐさま実践となった。



2001年~2011年

#### 青少年の育成こそが、クラブアイデン ティティー。

アイデンティティー。それは自我同一性。自分が自分である何かを意味する。企業にもコーポレートアイデンティティーという言葉があるように、様々な組織にもそれは必要である。東京本郷ロータリークラブとは何か。そしてどこに向かって進んでいくのか。そう言った事柄が10周年を経て議論されるようになってきた。

東京本郷ロータリークラブはまさに自我に目覚めるとき を迎えていた。

議論は続き、そして白熱していった。クラブに対して情熱があるからこそ誰もが妥協はしたくなかった。アイデンティティーを話し合う過程自体がこのクラブらしさに満ちていた。

「ロータリークラブには社会奉仕や国際奉仕、職業奉 仕、青少年奉仕といった奉仕のジャンルがあります。です から青少年奉仕は、ロータリークラブとしては当然のこと なのです。その上で我々のクラブとしては青少年の健全 育成をクラブアイデンティティーとして取り上げるべきだと いう意見が高まってきました。文京区は、言うまでもなく日 本を代表する文教の街であり、区内には東京大学を始め とする大学の他、講道館や日本サッカーミュージアムなど 様々な青少年を育成する施設があります。また今まで取り 組んできた奉仕活動も青少年の健全育成に関するもの が多かったのも事実です。よし、我々はこれで進もう! それ が定まったとき、急に視界がハッキリしてきたような気がし ました」と米倉会員は話す。創立15年へ。人で言えば青 春期にさしかかった東京本郷ロータリークラブは青少年 の健全育成という未来の芽を伸ばす活動をクラブアイデ ンティティーとして新たな出発を開始する。







12 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO \* 13

#### 感動の東京ドーム少年野球大会。

2003年1月13日、文京区内にある少年野球の6チー ムを招き少年野球大会が開催された。会場となったのは 東京本郷ロータリークラブの地域内にある東京ドーム球 場。日本の野球のメッカである憧れの東京ドーム。この地 で野球ができることに子どもたちは大喜び。それは一生の 記憶に残る思い出と大きな夢を提供できればという思い からの企画だった。参加したのは選手と保護者を合わせ て450人。プロ野球の試合のようにバックスクリーンに自 分の姿が映し出される。その様子を見て子どもたちはもち ろん、保護者も大きく感動。はつらつとしたプレーに一同 感激し、ケガもなく無事に終了することができた。準備も 運営もクラブ内有志で結成した実行委員会で実施。関係 した会員一同は地域の方々や親子のふれあいの場を提 供できたことに大きな喜びを得ることができた。この東京 ドーム少年野球大会で得た経験は後の東京本郷ロータ リークラブの奉仕活動に大きく役立っていく。





## 会員の事業所を青少年の健全育成の場に活かす職場体験。

アイデンティティーを自覚した東京本郷ロータリークラブ は青少年の健全育成への取り組みをいよいよ加速させ ていく。文京区内にいる中学生に様々な職場を見学・体 験させる職場体験学習も開始された。その受け入れ先としては会員の経営している事業所を提供した。

第一回が開催されたのは2005年5月14日と21日の両日。最初の職場となったのはホテルメトロポリタンエドモントだった。テーマは「ホテルを体験しよう」。そこでは社長を務める石川純祐会員からホテルの基礎概論が講義された後、参加した中学生たち全員が厨房やベッドメイキング、清掃などを体験。宿泊では見ることのできないホテルの裏方を体験することができた。

次の職場となったのは伊藤守会員が社長を務める株式会社毎日コムネット。旅行代理業を営む同社の仕事の様子を見学しながら「社長のススメ」をテーマにした伊藤守会員の講話を受けた。仕事は人生にとって大きなウエイトを占めている。それはただ収入を得て、生活をしていくためだけではない。仕事を通して自己を実現し、同時に社会に対して貢献をしていく。そこに職業の意義があり、それはロータリーの職業奉仕の考え方にも通じる。そういった仕事の大切さを考える機会を青少年たちに与えていきたい。そのために取り組まれたのが職場体験だった。



#### ビチャイ・ラタクルRI会長との交流。

2003年4月、国際ロータリーのビチャイ・ラタクル会長が来日。福岡、東京、仙台、札幌、青森を訪問し、各地区や地域のクラブメンバーと交流を重ねた。東京においては4月21日に新高輪プリンスホテルで講演会が開催。帝国ホテルにて晩餐会が行われた。ビチャイ・ラタクル会長はタイにおいて製薬会社社長や民主党党首、外務大臣、国会議長等を歴任。「慈愛の種を播きましょう」、「自己に挑戦を」「世界に踏み出す」等、その卓越した信念から発せられるメッセージは多くのロータリアンに感銘を与えてきた。ビチャイ・ラタクル氏との交流の集いには当時の会長である渡邉明会員の他、当クラブから10名が出席。渡邉会長はビチャイ・ラタクル会長夫妻と固い握手を交わした。



#### RI国際大会に参加。

2004年5月23日・24日の2日間にかけてRI国際大会が大阪にて開催され、東京本郷ロータリークラブからも20名を超える会員が参加した。新幹線で大阪に向かった会員は車中でロータリーバッジをつけている乗客が多いことに気づき、さらに気持ちは高揚していく。

「開会式が行われる大阪ドームに到着して驚きました。 日本、そして全世界から集ったロータリアンたちの代表5万人。その数が持つ迫力を目の当たりにしたときに大きな感動が湧き上がりました。開会式では各国の国旗が若々しい旗手に棒持され入場してきました。全部で166ヶ国です。一国一国が紹介されるたびに拍手が起こります。あらためてロータリークラブの世界性を感じました。最後に日本国旗が入場してきたときは万雷の拍手が起こりました」と近藤博隆会員は語る。

第2日目には大阪国際会議場で各ワークショップが開催。 RYLA(Rotary Youth Leadership Awards)討論会では青年のリーダー育成について活発な討論が同時通訳を介して英語で行われた。また日本語討論ワークショップでは日本語を話せる約150人のメンバーが参加。日本のロータリアン及びその活動について熱い議論が交わされた。「この大会に参加して感じたのは全世界に広がるロータリークラブというスケールの大きさと共に同じような悩みを世界のメンバーが抱えているという親近感でした。新たな視野が広がり、さらに奉仕活動にも力が入ります」と近藤会員は語る。



#### 華友会・郷友会が誕生。

様々な奉仕活動を通して絆を強めてきた東京本郷ロータ リークラブでは親睦を深めるために数多くの同好会も誕生し ていた。囲碁同好の士が集まって発足した硯心会に続き、

麻雀の愛好者が集まって2001年度に結成されたのが華 友会である。その発起人の一人である山路敏之会員は当時 をこう振り返っている。

「結成前は私と大住会員たち数人が集まって麻雀を楽しむレベルだったのですが、何回か繰り返していくうちに同好会に昇格させてみようという思いが麻雀仲間に高まってきたのです。それなら中国に関する文化についても関心を深めて行こうということになり、中華の華と友好の友を取り入れ、華友会という名称になりました」。その名の通り華友会は、定期的に集いを持ち、麻雀のコンペを開催。その他に中華料理を味わうなど中国の食文化に触れる機会も積極的に設けている。今、同会が目標として掲げているのは本場北京の訪問である。

ゴルフ関係においては郷球会とあすなろ会という東京本郷ロータリークラブに結成された2つのゴルフ同好会はそれぞれに活動を行っていた。郷球会は地区大会初出場で初優勝を飾るなどそのレベルは高く、一方、ゴルフそのものを仲間といっしょに楽しみたいという会員が集まり発足したのがあすなろ会だった。しかし、一つのクラブにゴルフの同好会が2つあることに対して違和感を持つ会員も出てきた。「本来、2つの会があったことは間違ってはいなかったと思います。しかし不景気等で会員数が減ってきている中、同類の同好会が2つもあることはやはり不自然な印象は否めませんでした。その中で一本化に賛同する人が増えてきたのです。本来の目的はゴルフを通して親睦を深めること。そのためには1つに統合するべきだと私も思いました」と2004年に郷球会の会長を務めていた松原一雄会員はそう語っている。

ただし、どちらかの会に吸収されていくというのはどちらの会員にも抵抗はあった。その結果として新しい名称の同好会が誕生する。それが郷友会だった。2004年10月21日、郷友会が設立され、その記念総会がホテルメトロポリタンエドモントで開催された。総会には三田村昌鳳、高橋完プロの講演も行われ、全員がゴルフファンの会員たちにとっては最高の集いとなった。







#### ジャワ島中部地震と津波災害へ義捐金 を贈呈。

2006年5月27日、ジャワ島中部を襲った地震と津波によりジョグジャカルタ周辺で数多くの犠牲者が出た。また世界遺産のボロブドウール寺院群、ブランバナン寺院群も被害を受けた模様と報道された。当クラブの会員がまず心配したのは交流のあったスラバヤメトロポリタンロータリークラブと支援したセント・アントニウス中学校の地震被害の様子だった。早速、当時の会長であったMr. Thomasに地震災害のお見舞いをメールで送りながら中学について尋ねた。2日ほどして彼から返事があり、中学校は震源から約200km離れていたので無事であること、インドネシアのロータリアンや多くの人が災害の救援にあたっていること、クラブや地区の皆さんによろしくという内容だった。

これを契機にクラブ単独の国際社会奉仕活動として、わずかな金額でよいから継続的に支援する事業を立ち上げ、両クラブの関係をさらに深める大切さを痛感。ロータリー年度がまたがっているので理事会、被選理事会で検討した結果、地震災害の義捐金として当クラブから10万円相当額を送金した。



#### 「文の京こどもまつり」を支援。

2006年11月12日「文の京こどもまつり」が文京スポーツセンター・教育の森公園で開催され、東京本郷ロータリークラブの代表が参加した。「文の京こどもまつり」は、文京区の家庭の日の啓発事業として平成14年から実施しており、区内における親子向けの一大イベントとして、毎年多くの来場者を数えている。この年は文京区青少年対策地区委員会、九地区合同行事実行委員会の主催で、文京区共催、東京本郷ロータリークラブ協力のもとで行われた。開催前のセレモニーで相本会長が助成金10万円の贈呈を行い、東京本郷ロータリークラブの青少年育成事業への取り組みを紹介した。

以降、インフルエンザの流行のために開催自体が中止となった2009年迄、「文の京こどもまつり」への協力は青少年の健全育成という東京本郷ロータリークラブのアイデンティティーにふさわしい活動の一つとして毎年行われた。



#### 教育現場に新風を吹き込んだ 職場体験発表会。

それまで何度か行われてきた職場体験学習。文京区においても、これを促進していたが、受け入れてくれる事業所が少ないという問題に学校は直面していた。地域の人たちに職場体験学習の意義を理解してもらい、子どもたちに様々な職場が門戸を開いてほしい。その成果を多くの人に発信できる機会を持ちたい。その思いが結実したのが職場体験発表会だった。2007年5月11日、文京シビックセンター小ホールで開催された同会合は区内の第五中学校、第三中学校、第一中学校の代表の生徒による実践発表、職場体験を受け入れた企業からの発表、さらに「働くってどういうこと」をテーマに、米倉会員がコーディネーターを務めるパネルディスカッションが行われた。

東京本郷ロータリークラブと文京区教育委員会の2団体が主催したこの会合は、青少年の健全育成をクラブアイデンティティーとする当クラブらしいイベントであり、同時に教育の現場や地域の職場において社会との新たな接点を見いだし、新風を吹き込む意義深い集いとなったのではないだろうか。少なくとも会員たちはその手応えを感じた。



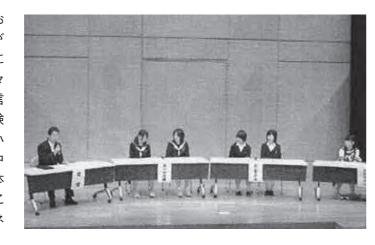
青少年交換留学生、米山奨学生に加えて、ロータリークラブの留学生支援にロータリー財団国際親善奨学生がある。

この目的は世界各国の人々と国際理解と友好関係を増進させることにあり、派遣先において勉強の傍、"親善使節"としてロータリークラブ、家庭、事業所などを訪問し、留学国の諸事情の理解に務める義務がある。

この奨学生になるには3回にわたる審査や面接試験がある。1次選考は提出先ロータリークラブによる書類審査と面接試験。2次選考はロータリー財団委員会・分区選考委員による面接試験、そして3次選考は地区ガバナー並びにロータリー財団委員会による面接試験である。この厳しい選考をクリアし、東京本郷ロータリークラブでは4人の奨学生を今まで派遣してきた。その一人が築地浩也君(写真右手前:2017年9月撮影)である。

築地君は当時東京大学で土木工学を学ぶ4年生。アメリカ留学も経験し、さらにイギリスのImperialCollegeLondonで1年間環境工学に関する修士プログラムを受講するためにこの奨学生となった。

彼のカウンセラーを務めた古関伸一会員は当時を振り返り こう語る。「築地君は、自信を持って推薦できる優秀な奨学生 でした。現地の大学院で立派に学業を修めるだけでなく、ホ ストクラブとの親善を深め、農業ボランティアに参加するなど





"親善大使"としても素晴らしい活躍をしました。現在は世界的なコンサルティング会社に勤務しながら板橋方面のロータリークラブでローターアクトとして活躍しています。私自身、彼のような日本、ひいては世界を担う人材をカウンセラーとして応援できたことを誇りに思っています」。

#### 創立20周年記念事業東京ドーム 少年野球大会。

クラブ結成20周年をいかに飾り、何を後世に伝えていくべきか。2010年を迎えるとその議論は活発になっていった。そして結成されたのが創立20周年記念実行委員会だった。実行委員長を務める鈴木嘉男会員は、文京区が講道館やサッカーミュージアムなどスポーツ施設に恵まれた地域であることを改めて見直す。中でも東京ドームはクラブと縁の深い特別な存在となっていた。少年野球を東京ドームでやってみよう。その提案はすぐに合意を得られた。ただし、問題はいつ開催できるか、だった。実際に東京ドームが空いており、しかも学校が休みの日でなければならない。この2つの条件をクリアできる日が1日だけあった。

「8月11日の午前中に東京ドームで少年野球ができる件を文京区少年野球連盟に相談すると大喜びでお正月とクリスマスが来たようだと喜んでいただきました」と鈴木実行委員長は話す。連盟の担当者がお正月とクリスマスと表現したことに際しては理由があった。東京ドームで野球ができる、それは夢のようなできごとである。さらに、その上で子どもたちには素晴らしいプレゼントが用意されていた。それは元プロ野球選手の村田兆治さんを講師に招いての野球教室だった。離島などで少年野球の教室を開いている村田氏は、クラブの青少年育成に対する理念と活動に共感。実行委員からの申し入れを即、快諾していただいた。そしてクラブ創立20周年記念事業として東京ドームで少年野球大会を8月11日に開催することができた。







18 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO

THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO \* 19

#### 幻の20周年記念例会。

2011年3月16日、20周年を祝う記念例会が東京ドームホテルで開催される予定だった。しかしそれは3月11日に起きた東日本大震災を考慮し自主的に中止とした。未曾有の大震災に苦しみ、悲しむ人々がいる。東京においてもまだ日に何度も余震は発生していた。その上で電力不足による節電を考慮しなければならなかった。中止の判断は正しかった。幻となった当日の式次第を写真で紹介する。



#### 米山奨学生たちとの心の交流。

東京本郷ロータリークラブは青少年の交換留学生の他に 大学院等の学術機関に学ぶ留学生たちを支援する取り組み を行ってきた。それが米山奨学生だ。主にアジア諸国から 来日 し、一流の研究者を目指して学ぶ人材を奨学金で支えるのが その目的だ。奨学生の多くは慣れない日本という異国で生活 費や学費を工面しなければならない状況にあった。東京大学 大学院で教育学を専攻していた高吉嬉さんもそうだった。学費 や生活費を工面しながらの 研究生活は苦労が絶えなかった。

東京大学大学院で学んだ河在根さんは一度韓国で社会人 として働き、結婚、その上でさらに研究者として道を究めるため に来日。既に家族もいた。そのため学問だけではなく、生活も 考えなければならなかった。

「クラブの皆さんは韓国の人たちより親しい存在」と話すのは河在根さん。家族を韓国に残し、単身での生活。その大変さを理解し、様々な面から親切に支えてくれたのがクラブの会員だったと言う。いつしか河さんにとってクラブは家族のような存在になっていった。「韓国に帰ってからはお世話になった人とそのご家族を招待し、向こうの観光地をご案内したのもいい思い出になっています。私の家族と皆さんの家族。今では家族ぐるみのおつきあいが続いています」と河さんは語る。

「韓国にいたときは反日教育を受けていましたので最初は日本人全体にいい印象を持っていなかったのです」と話すのは高吉嬉さん。そんな彼女はある日奨学生として生活を続ける中で研究者として飛躍できるチャンスを得た。それは自分の研究成果を自費出版する機会に巡り会えたことだった。しかし、お金が必要だった。そこにかかる費用をカンパというスタイルで応援してくれたのも東京本郷ロータリークラブの会員だった。元米山奨学生・元ロータリー財団奨学生・元 青少年交換留学生たちと東京本郷ロータリークラブの会員たちとの交流の場として「本郷国際友の会」が毎年開催されている。元米山奨学生も多忙の中、海外をはじめ各地から集っている。2016年の夏に開催された集いにも前述の河在根さん、高吉嬉さん、さらに現在米山奨学生として学習院大学で学ぶ孔玲玲さんをはじめ多数のメンバーが参加した。





#### その次の10年

## 真·世界

### 原点からぶれず真価を発揮した30年

その悲劇は創立20周年祝賀する記念例会の5日前に起きた。 今もけっして忘れることのできない東日本大震災。 一瞬にして多くの人の命や暮らしが奪われた。

人や組織の真価が問われるときがある。
2011年の東京本郷ロータリークラブもまさにそうだった。
だからこそ、真価を発揮すべきだろう。
迷うことなく、そのために私たちは歩みを進めた。
しかし、原点を見失うことはなかった。
今まで以上にその原点を凝視し、青少年たちにささやかな希望を届けた。
そして様々な足跡を残すことができた。



#### 被災地の子どもたちを招いて 東京ドーム少年野球大会。

#### 復興支援で東京ドーム少年野球大会案が浮上。

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北。その復興 支援のために震災後の7月に復興支援特別委員会が組 織された。委員長の任命を受けたのは鈴木嘉男会員。何 度もクラブでは重責を担った経験があったが、このときは 大いに悩んだ。

具体的に何をすればいいのだろうか・・・。自粛した20周年記念例会の予算は基金と共に義援金として復興支援に使っていただくことにした。しかし、それだけでいいのだろうか。鈴木嘉男会員がすぐに思い出したのは20周年で開催した東京ドーム少年野球大会だった。普段から文京界隈で暮らし、東京ドームを何度も見ている子どもたちですら、目を輝かせてこのプレゼントを喜んでくれた。それが震災で野球をする場所のない被災地の子どもたちだったらどうだろうか。

鈴木嘉男会員以外の何人かの会員もそのことを考えていた。当時、東京ドームの会長を務める林有厚会員からも「ぜひやってみたらどうか」と言われた。またドームでのイベント開催で豊富な経験を持つシミズオクトの清水卓治会員がいることも力強かった。





## 東京ドーム少年野球大会実行委員会が立ち上がる。

本当に東京ドームの野球でいいのかという迷いもあった、しかし復興支援の視察を目的に委員たちが東北の地を訪れたときに心が決まった。

目にしたのは畑のビニールハウスで野球を練習する姿だった。津波によってグラウンドが使えないところもあった。それでも工夫をしながら健気に野球に打ち込む子どもたち。その姿には悲しみを吹き飛ばす明るさがあった。

この子どもたちがこれからも逞しく育っていくことが被災地の力になっていくはずだ。2012年の夏、東京ドームで東北の子どもたちを招いての野球大会が決定し、東京ドーム少年野球大会実行委員会が組織された。実行委員長は復興支援特別委員会と委員長を兼務する形で鈴木嘉男会員が任命された。また東京小石川、東京上野、東京後楽といった近隣のロータリークラブからの協力も得ることができた。



#### いつしか「走りながら進める」が合言葉に。

東京ドームでの少年野球大会の開催。そこには大きな問 題は3つあった。1つは子どもたちや同伴する家族たちの移 動や宿泊手段の確保。2つめはそれらの予算の捻出。そし て3つめは、根本的な問題となるが会場の東京ドームをいつ 借りることができるかということだった。日本を代表するプロ 野球の殿堂である。スケジュールはビッシリ埋まっている。し かし2012年の11月末に2013年7月25日の午前中なら空 いていると連絡があった。実行委員会の心が躍り、残り2つ の課題に取り組んでいった。東北に行きバス会社へ交渉、 東京での移動のために都バスも手配した。宿泊先は東京 ドームホテル、ホテルメトロポリタンエドモント、ホテルグランド パレスの3つのホテルが破格の価格で協力してくれた。多く の企業が大会の趣旨に共感し、スポンサーとなっていく。関 わった会員全員が子どもたちのやって来る日を目指して懸命 に汗を流した。とにかく時間はなかった。他にも様々な問題 はあったが立ち止まる余裕はなかった。「走りながら進める」 ことがいつしか合言葉になっていった。

#### 3年続けて野球大会を開催。

復興支援の少年野球大会は3年間に三回行われた。単発では復興支援の効果が得られないとの意図があったためだ。第一回は2013年7月25日。第二回は2014年8月23日。第三回は2015年8月1日。第二回は山路敏之会員、第三回は小出豊会員がそれぞれ実行委員長を務めた。第一回の前日、東北の子どもたちがやって来た。

レセプションでは堀内恒夫元巨人軍監督も参加。25日 当日、受付は朝6時半、第一試合開始は8時5分。第二試 合は9時20分からスタートした。早朝から開始するのは午前 中しか会場を使えなかったからだ。朝が早いにも関わらず、 歓喜の表情で子どもたちがゲートから入ってくる。試合に参 加しないメンバーにはプロのコーチによる野球セミナーが開 催された。それらの運営をプロのノウハウで支えたのは東京 ドームを知り尽くした清水卓治会員のシミズオクトだった。

第二回は前日の8月22日に子どもたちが到着。17時半からは東京ドームで開催される巨人VS中日戦を観戦した。今、プロ野球の選手たちが試合をしている人工芝の上に明日は自分が立つ。そう考えるだけで子どもたちの胸は躍ったことだろう。試合が始まると子どもたちは目を輝かせてプレーに夢中になった。客席で声援を送る保護者たちもその感動を共有していた。



22 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO \* 23

#### 文京社会験学コンテストが開催。

青少年の健全育成をクラブアイデンティティーとする東京本郷ロータリークラブは新世代会議や職場体験、そして前述した東京ドームでの野球大会など新しい企画を次々と実現してきた。そして2014年には文京区内の高校生を対象として実施したチャリティ起業体験プログラム「文京社会験学コンテスト」を協賛した。同プログラムはNPO等の寄付先団体でのボランティア活動を経験した後、チャリティ資金の獲得に向けたイベントや物販などを企画立案、実施に向けた一連の流れを全て自分たちのグループで行うもの。

この活動で得た収益は、自らの希望するNPO等の非営利組織へ寄付することで『起業体験×社会貢献』が体験できる。通常の仕事体験を超えて、事業を起こし、利益を上げ、それをプロが審査していくこのプログラム。ここで高校生たちはビジネスに対する確かなセンスと自ら考え、企画し、行動していく実践的な力を養っていったにちがいない。

同時に生み出した利益を社会貢献のために提供していく ことで利己だけではなく、利他の大切さも知ることができた。 この文京社会験学コンテストは2015年より、「まじプロ」と 名称を変え、継続して開催されている。

#### 盛大に行われた25周年記念例会。

2016年3月16日に創立25周年を祝賀する記念例会が東京ドームホテル天空の間にて夕刻より開催された。2011年に20周年記念例会を自粛した会員たちにとって、意気込みは大きかった。オープニングで能舞囃子「高砂」と仕舞「土蜘蛛」が演じられ、東京本郷ロータリークラブの記念すべき佳節を祝した。その後、25周年を振り返るスライド上映や記念品の贈呈が行われ、参加者全員で新たな出発を誓い合った。

#### ノエミ デゥルルさん 送別会 ホスト ファミリーへの感謝の会が開催。

交換留学生としてベルギーから来日し1年間滞在していた ノエミ デゥルルさんの送別会とホストファミリーへの感謝の 会が2016年7月11日、文京区内で開催された。今回の交 換留学生の受け入れは大住会員のご家族を除き、なかなか 東京本郷ロータリークラブ内でホストファミリーが見つからな い中、東京江東ロータリークラブ鈴木様ご家族、東京上野 ロータリークラブ園部様ご家族、また元青少年交換留学生 名井様ご家族が引き受けていただいた。1年間の滞在で日 本語が上達したノエミ デゥルルさんは交換留学の経験を活 かし、将来は旅行関係の仕事に就きたいと夢を明るい笑顔 で語っていた。





#### 本郷国際友の会がスタート。

米山奨学生、ロータリー財団奨学生など様々なステージで留学生たちを支援しているロータリークラブ。しかし留学の期間が終了するといつしかその関係は断ち切れてしまうことが多い。そういった中、現役の奨学生たちや既に社会の第一線で活躍しているOBOGとの交流を活発に行っているのが東京本郷ロータリークラブ。2015年からは米山奨学生、ロータリー財団奨学生、そしてそのOBOGたちを「本郷国際友の会」と言う名称で一つの組織にしてスタート。2016年7月23日には親睦の集いがホテルメトロポリタンエドモントで開催され、支援した青少年たちがより社会の中でも成長していることを確かめ合えた。



#### あじさいまつりのチャリティバザーで 震災遺児を支援

文京区は四季折々に美しい花が咲き、それにちなんで5つのまつりが毎年催される。文京さくらまつり、文京つつじまつり、文京あじさいまつり、文京菊まつり、文京梅まつりがそうである。これらは文京5大花まつりとして親しまれ、2003年から東京本郷ロータリークラブは白山神社と白山公園で毎年6月に行われる文京あじさいまつりでチャリティバザーを実施してきた。そして東日本大震災以降は、バザーの収益金をその復興事業の一環として震災遺児となった青少年を援助する「ロータリー希望の風奨学金制度」に寄贈。2017年第33回となるこのまつりにも会員が選りすぐりの品物を持ち寄り、バザーの出店を行った。



#### 第20回 新世代会議 「ここが怖い!子どものケータイ・スマホ」

東京本郷ロータリークラブが青少年育成のために力を注いできた新世代会議。その記念すべき第20回が2018年9月20日に文京シビックセンター26階スカイホールで開催された。今回のテーマは「子どもとケータイ、スマホ、SNSのかかわり方」を選んだ。講師はチェックフィールド株式会社代表取締役を務め、東京紀尾井町ロータリークラブの一員でもある目代純平氏。テレビでは「ネット問題評論家」として出演し、小中学生や保護者、先生方に対して「安全なケータイ・スマホ・ネットの使い方」をメインテーマに講演ならびにワークショップ活動を展開してきた。

文京区立幼稚園、小学校、中学校のPTAアンケートで関心の高かったテーマなだけに事前質問も多く、当日は保護者の方々が時間前から多数集われた。講演はテンポよく最新の事例を含めたビジュアルも豊富なものとなり、参



24 \* THE ROTARY CLUB OF TOKYO HONGO

加者からは、「基本は親子の信頼関係で、一緒にルール作りをする事がポイントという原則がわかりよかった」、「写真や投稿が取り返しのつかない問題を生じかねない事を親子で共有したい」、「料金未払いでブラックリストに載り、ローンなど組めないなど経済的制裁を受ける可能性があることを知り驚いた」などの感想をいただいた。

#### 3度目のホストクラブを引き受けた インターシティミーティング

2019年11月13日ホテルメトロポリタンエドモントにて、東京本郷ロータリークラブがホストクラブとなり、国際ロータリー第2580地区北分区合同例会並びにインターシティミーティング(IM)が開催された。合同例会にて、小出ガバナー補佐が挨拶。その後、インターシティミーティングとなり、作家の江上剛さんから記念講演「令和新時代に我々の進むべき道」が行われた。

今回の合例会並びにインターシティミーティングを開催する上ではホストクラブが重要な役割を果たす。ホストクラブは当日の運営から司会進行、会計の管理にいたるまで様々な重責を担うため、通常なら2年から3年ほどの時間をかけ、毎回の例会を活用しながら入念に準備を進めていく。しかし、2018年の8月の段階で手を挙げるクラブがなかった。そこで最終的に2000年と2007年に2回ホストクラブを務めた当クラブが引き受けることとなり、ここでもその真価を発揮することができた。



北分区合同例会(IM)



#### 最後の開催となった「文京区中学生 職 場体験発表会」

2020年1月31日14時から文京シビックホール小ホールにて「文京区中学生 職場体験発表会」が行われた。今回も選別された3つの区立中学校(文京区立第十中学校、文京区立文林中学校、文京区立茗台中学校)が実践発表。恒例の「意見交換」では各校から2名が代表生徒として舞台にあがり、コーディネーターを務める東京本郷ロータリークラブの松岡会員が発する質問に答える形で進行した。

同発表会は2007年から文京区立の中学生の健全な 就労観を育むことを目的に、文京区と東京本郷ロータリー クラブが長年に渡り取り組んできたが、今回の開催が最後 になった。当日は文京区より東京本郷ロータリークラブの 功績に対して感謝状が授与。「青少年の健全育成」の具 体的取り組みとしてきた事業の一つが終結した。

#### コロナ禍の中、例会の臨時休会が続く

2020年3月4日から6月24日、そして2021年1月13日から3月3日まで臨時休会となった。緊急事態宣言を受け、新型コロナウイルスの感染を防止するため、止むを得ない措置ではあった。しかし、30周年記念事業をはじめとする解決しなければいけない課題は山積していた。1日でも早く会ってそれらの課題について話し合いたかった。特に2020年の3月から始まった3ヶ月を超える臨時休会ではいつ収束するかわからないコロナ禍の不安とともに焦りも生じていた。

#### 議論が白熱した30周年記念事業と 記念式典の開催

30周年記念事業をどのように実施するか、その第1回 実行員会が櫟本(とちもと)実行委員長を中心に1月22日 に開催され、活発な議論が交わされた。第2回実行委員会 では具体的な記念事業のプランが委員から提案。誰もが 華々しい30周年をイメージした。

3月は新型コロナウイルスのパンデミックで例会は臨時休会。しかし4月には実行委員会がオンラインで行われた。そこでは文京区内の青少年が参加する「本郷・ロータリー音楽祭」というプランに多くの委員が賛成した。

本格的な夏を迎えた頃、新型コロナの感染は第2波に 突入。そういった中で音楽祭はリアルではなくオンラインで の方向が強くなっていった。また記念例会自体も中止か実 施かの議論が白熱した。その後、音楽祭は練習などで対面 する場合もあり感染リスクが懸念され、延期を望む意見が 強まっていった。それと入れ替わるように記念事業では心で はなく、物質的な支援が議題に上った。

秋から冬へ、実行委員会は回を重ねる中で30周年記念 事業は区内の子どもたちや医療従事者への支援に決定。 1月の第22回実行委員会では、記念式典がオンラインで 開催することを理事会に提案することが決まり、理事会に て承認された。





#### 「子ども宅食プロジェクト」 に図書カード を寄贈

2021年3月東京本郷ロータリークラブは創立30周年記念事業の1つとして「子ども宅食プロジェクト」に図書カードを寄贈した。同プロジェクトは、ふるさと納税制度を活用し、食品の配送をきっかけに、子どもとその家族が必要とする支援につなげ、地域や社会からの孤立を防ぐ事業となる。この寄贈によって区内の宅食利用中の中高生がいる全669世帯に図書カードと共に「進級・進学おめでとう」という会員の手書きの応援メッセージが届けられた。





#### 区内の開業医にアルコール消毒液と 医療用サージカルマスクを贈呈

もう1つの創立30周年記念事業として実施したのが文京区医師会の会員である104の開業医に対して行われたアルコール消毒液と医療用サージカルマスクの贈呈だった。3月1日松岡会長と櫟本(とちもと)実行委員長が文京区医師会山口会長を訪ね、一開業医あたり消毒液2リットルとマスク30箱を届けた。

